

新版教科書で、楽しい書写授業を

上越教育大学附属中学校教諭

清水陽一郎

しみずよういちろう
清水陽一郎

1970年生まれ。東京学芸大学書道科卒業後、新潟県中学校教諭を経て、上越教育大学大学院にて書写指導について研究。現在上越教育大学附属中学校教諭。全国大学書写書道教育学会会員。上越国語教育連絡協議会書写委員。

さまざまな実践をされている清水先生に、三回にわたって連載していただきます。第一回は、新版教科書をご覧いただきながら、書写授業のアイデアをお聞きしました。

行書の特徴をとらえる

— 今回の学習指導要領では、行書の確実な定着が求められています。新版教科書ではその点も重視して、構成を工夫しましたが、ご覧になっていかがでしょうか。

清水 楷書と行書を大きく示して「違いを話し合おう」としているページがいいですね（※1）。比べるからこそ見えてくることって、たくさんあると思うんです。これまでは、私が楷書と行書をそれぞれ半紙に書いて、子どもたちに見せていた

のですが、あらかじめ教科書に示されていると、準備の時間がかからず助かります。

このページを見せて、「見比べて気づいたことを発表しよう」と投げかけると、子どもたちは「行書は線がつながっている」「行書には丸みがある」などの特徴を挙げるでしょう。その後、両開きのページをめくって、行書の五つの特徴を確認させたいですね（※2）。限られた時間の中で、行書を確実に定着させなければならぬので、行書の特徴がパッと見てわかりやすくまとめられているのは、ありがたいです。

— 先生は、行書の筆使いについても丁寧

に指導されていますね。「国語教育相談室63号」で、ご紹介いただきました。

清水 子どもたちに、行書を書いている様子を真上・横など、さまざまな角度からデジタルカメラの動画機能を使って撮影させ、行書と楷書の筆使いの違いを考えさせました。筆使いを言葉で説明することは難しいのですが、「筆を上下させないで一気に書いている」「流れるように筆を運んでいる」など、子どもたちなりの表現で議論し、説明していました。これからも、そうやって考えさせた後に、教科書の「点画の方向や形が変化するときの筆使いを知ろう」（P28・29）を見せ

たいと思います。行書の筆使いの特徴について、図やイラストなどを使って詳しく説明されていますから、合わせて活用したいですね。

2 目的意識や相手意識をもつ

— 行書の確実な定着とともに、「目的や必要に応じて、楷書または行書を選んで書くこと」も求められていますね。

清水 書字行為で、目的意識や相手意識をもつことが重視されています。私は以前、「校外学習でお世話になったお年寄りの方に手紙を書く」という授業をしたことがあります。そのときに、「楷書、行書どちらで書いたらよいか」と子どもたちに話し合いました。すると、「お礼状だから、きちんとした楷書がいいと思う」「いや、年配の方に書くのだから、昔の手紙のように、すらすらと書いた行書がいいと思う」と意見が分かれたんです。最終的には、どちらの判断も射っていると思ったので、それぞれがよいと思うほうで書かせました。また、小筆・ボールペンなどの用具や、封筒や便箋などの用材についても、どんなものを選ん



※1 楷書と行書の違いについて話し合う教材。見開きで大きく示した。（P22,27）



※2 両開きのページをめくると、行書の成り立ちや筆使いの特徴が一目でわかるような紙面構成になっている。（P23-26）



※4「伊勢物語図色紙」の文字と配列を紹介したコラム。(P57)

な感覚で、きつと授業が盛り上がり、国語の授業ともつながるし、平仮名のもとなつた漢字や、変体仮名にも興味をもつきっかけにもなると思っています。

—今日は、楽しいアイデアをたくさんお話しいただき、ありがとございました。次号から、清水先生が実際に行われた授業をご紹介いただきます。

うかなあ。私は違う感じ方をしたけど」と話す子など、さまざまな反応があつて楽しい授業でした。

それから、身の回りの文字ということでは、いつかNHKの大河ドラマの題字を子どもたちと分析してみたいと思つています。いま放映されている『平清盛』は、金澤翔子さんという若い書家の、力強い書です。大河ドラマの歴代の題字は、著名な書家が手がけているものが多いのですが、さかのぼって見ると、「翔ぶが如く」（一九九〇年）は、原作者・司馬遼太郎氏の書、「毛利元就」（一九九七年）は、毛利元就自身の書、と多彩です。また、題字に込められた思いやエピソードがとても興味深い。いつか授業で取り上げてみたいと思つています。

—新版教科書では、コラムのコーナーも充実させました。先生の心に留まつたものはありましたか。

清水 「昔の人が書いた文字を見よう」（※4）はいいですね。このページと関連づけて、「竹取物語」の写本を子どもたちに見せたいと思つています。そして、「くずし字辞典」を使って、当時の人が書いた文字を読み解かせてみたい。少し高度に思えるかもしれませんが、「竹取物語」は比較的平易な書き文字なので、中学生でも無理なく取り組めると思つます。暗号を解くような感覚で、きつと授業が盛り上がり、国語の授業ともつながるし、平仮名のもとなつた漢字や、変体仮名にも興味をもつきっかけにもなると思っています。

他には、「デザイナーと文字」（P71）も興味深く読みました。このように、文字にかかわる仕事をしている人の話をもっと聞いてみたいです。例えば、結婚式の招待状や賞状の名前書きをする筆耕屋さんに、場面によって、どんなことに気をつけて書いているのか、うかがつてみたいです。

それから、以前に、フォントデザイナーが出てくるテレビ番組を観たのですが、「ドット（・）のデザインにもこだわっている」「近くで見たときと、引いてみたときの印象、どちらも考えてデザインする」など、書風・書体への強いこだわりが、とてもおもしろかったです。子どもたちにフォントデザイナーの話を紹介したり、近くにフォント会社があれば、インタビューしたりしてもいいかもしれない。手書き文字だけでなく、活字文字についても世界を広げることが、将来、子どもたちがパソコンで文章を書くときに役立つと思います。

3 身の回りの文字を調べる

—三年生の学習事項には「身の回りの多様な文字に関心をもち、効果的に文字を書くこと」が加わりました。これも、今回大きく変わったところですが。

清水 いろいろな授業展開が考えられそうですね。教科書に「身の回りの文字を集めてレポートにまとめ、紹介しよう」というページ（※3）がありますが、私も同じような授業を行ったことがあります。子どもたちに、家にあるちらしや雑誌を持つてこさせたり、街に出て看板の写真を撮らせたりして、自分が「いいな」と思う書き文字を集めさせました。しか

だ方がよいのか話し合わせました。そうやって議論することで、目的や相手に合ったものを、選択しようという意識が高まってくるんです。

私は、書写の授業でも、なるべく「思考」の部分充実させたいと、いつも思つています。子どもたちに議論させたり、気づいたことを発表させたりするなど、言語活動に結びつけることを意識しています。

し、文字を集めることはできても、「なぜ、いいのか」と聞くと、言葉でうまく説明ができないんです。

それで、持ち寄つた文字をグループで分析させることにしました。すると、「書きぶりが柔らかくて、この商品のイメージに合っている」「行書で大胆に書かれ

た文字が、このお店の『和』の雰囲気と調和している」など、子どもたちなりに文字から受けるイメージを言語化して、論理的に説明しようとしていました。そして、最後にはレポートにまとめ、クラスで発表会を行いました。発表を聞きながら「ああ、わかる」と共感する子や、「そ

※3 身の回りの文字を集め、レポートを作って発表する教材。(P68-69)

